「しようがない」構文

中　村　嗣　郎

1. はじめに

本稿は，動詞の連用形と名詞「よう」から成る「Ｖよう」を含む「選びようがない，忘れようがない，行きようがない，救いようがない，判断しようがない」のような表現を取り上げる。以降，こうした表現を「しようがない」構文と呼び，この構文がもつ特性を見ていく。それらの特性のいくつかは，この構文独自のものに一見思えるが，それらについての説明も試みる。とは言え，理論的に深く入り込むことはせず，「しようがない」構文についての観察および記述を本稿の第一の目的とする。

「しようがない」構文については，影山（1993：366）が例を挙げている。

(1)　a. 手の付けようがない

　　b. 手を付けようがない

それによると，前者は語彙部門で生成され，後者は統語部門で形成される。また，Sugioka（1986：101）にも言及があり，「Ｖよう」に否定表現が伴う場合，全体として動詞句のような振る舞いを見せることが指摘されている。

(2)　金｛の／を｝使いようがない。

まず，(3a)，(4a) のように「Ｖよう」の前の名詞に「の」格が付く場合と (3b)，(4b) のように「を」格が付く場合とでは，構造が異なることを確認する。

(3)　a. *手の｛まったく／少しも／ぜんぜん｝付けようがない。

　　b. 手を｛まったく／少しも／ぜんぜん｝付けようがない。

(4)　a. *責任の｛どうしても／ほとんど／誰も｝取りようがない。

　　b. 責任を｛どうしても／ほとんど／誰も｝取りようがない。

「を」格名詞のあとには副詞類が置けるが，「の」格名詞のあとには置けない。ここから「手の付けよう」や「責任の取りよう」が構成素を成すことがわかる。そうした名詞句は「ない」を述語とする文に支配され，それと同じように「まったく，どうしても」などの副詞も文に支配されていると仮定できる（「まったく手の付けようがない」は自然な表現）。そして，(3b) の「手を」と (4b) の「責任を」も同様に文に直接支配されていると仮定する。したがって，構造の違いを次のように考える。

(5)　a.［文　［名詞句 責任の　取りよう］が　　ない　］

　　b.［文　［名詞 責任］を　［名詞 取りよう］が　　ない　］

「責任を取りよう」の「責任を取り」が構成素（動詞句）を成すという分析も考えられるが，本稿ではその立場を取らない。以下のような例がそうした分析を困難にするからである。

(6)　a. 彼女に連絡を取りようがない。

　　b. 彼女に連絡の取りようがない。

（6a）については「彼女に連絡を取る」が自然な表現なので「彼女に連絡を取り」が構成素を成すと考えられようが，（6b）の「彼女に連絡の取り」に対応する「*彼女に連絡の取る」は不自然である。本稿では次のような構造を仮定する。

(7)　a.［文　［名詞 彼女］に　［名詞句 連絡の　取りよう］が　　ない　］

　　b.［文　［名詞 彼女］に　［名詞 連絡］を　［名詞 取りよう］が　　ない　］

本稿は，この「しようがない」構文における形式面に焦点を当て，この構文がもつ特性について観察し，考察を加える。まず，一見独特と思われる特性について取り上げ，次に通時的な考察を加える。そして，それを踏まえて，「しようがない」構文の特性について振り返る。

2.「しようがない」構文の特性

この節では「しようがない」構文がもつ特性について観察する。

2.1　なぜ構文として扱うのか

「しようがない」構文の分析では，複合的な名詞「Vよう」とそれに後続する否定要素までの範囲が特定の意味に対応すると考える。

(8)　形式：［ … Vよう が　NEG ］

　　意味：～することができない

形式は基本となるものを簡略的に記した。助詞「が」は「も／は／の」になることもある。また，否定（negation）の表現は「ない」を基本とし，「ありません／ございません／あるまい」など他の表現の場合もある。そして，この形式が特定の意味〈～することはできない〉と結びつく。（Sugioka 1986 は，この構文が再分析により，can't「～できない」の意味になると考える。）なお，〈V できない〉という意味は能力的に無理であるという意味ではなく，状況的に無理だという意味である。（能力的に泳げないことを「泳ぎようがない」と言うことはできない。）したがって，意味が異なる次の例は「しようがない」構文ではない。

(9)　a.（あの時の）弟　{の／*が}　喜びようはなかった。（＝弟が喜んだ）

　　b.（あれほどの）部屋　{の／*を}　荒らしようはなかった。（＝部屋を荒らした）

ここでの意味は「行為や出来事が尋常ではない；異常である」というものであり，「Ｖよう」への名詞の接続は「の」格だけが許される。また，これらの例を「弟の喜びようと言ったらなかった」や「部屋の荒らしようったらなかった」のように言い換えることもでき，やはり「の」格のみが許される。「Ｖよう」自体はそれだけで意味解釈が可能だから（「～する方法」の意），単独で用いられることもできるが，「しようがない」構文に見られる格標示の多様性は許されない。

(10)　a. 彼は，金 {の／*を} 使いようが尋常じゃない。

　　b.（一週間で百万円とは）荒っぽい金 {の／*を} 使いようだ。

構文レベルでなく，「Ｖよう」の部分だけで格標示の多様性を説明しようとすると，「Ｖよう」と同じように動詞の連用形を含む複合的な名詞にも当てはまってしまう可能性があり，都合が悪い。「Ｖかた」などがその１つである。

(11)　このコンピューター {の／*を} 使い方がわからない。

本小節で見たように，「しようがない」構文は，意味を担った部分から成るものの，「Ｖようがない」全体で見る必要があることがわかった。以上から，格標示の多様性は「しようがない」構文に見られるものと考え，話を進めていく。

2.2　存在（否定）文との融合：「に」格名詞の出現

「しようがない」構文は，「ない，ありません，ございません，あるまい」などの否定表現とともに形成されるが，対応する肯定表現は「ある」で代表され，ある場所にあるモノが存在するという意味を表す存在文である。形式としてはそれぞれ「に」格名詞と「が」格名詞であらわれる。

(12)　カバンに財布がない（ことに気づいた）。

「しようがない」構文はこの存在文の形式を借りて表現される。そして，「Ｖよう」が「が」格名詞の位置を占める。存在文の表現パターンに見られる「に」格名詞が「しようがない」構文でも使われることがある。「に」格のあとに話題化の助詞「は」が付き，「には」とすると自然な解釈が得やすい。

(13)　a. 私にはどうしようもなかった。

　　b. 私にはどこにも逃げようがなかった。

（13a，b）において，「私には」は「Ｖよう」の動詞が意味する行為の動作主に対応する。また，（13b）では「私には」と「どこにも」の２つの「に」格名詞があらわれている。「どこにも」は「逃げる（←逃げ）」という述語の項であると考えられる。「私には」は（13a）と同様に存在文の場所表現につながる「に」格名詞と考えられる。また，「に」格名詞は有情物であるほうが座りがよい。

(14)　{彼ら／？*その機械} には一晩で１万枚のチラシを刷りようがなかった。

なお，「私には」を「私は」（あるいは「私が」）とすることもできる。

(15)　a. 私はどうしようもなかった。

　　a. 私がどうしようもなかったとき，彼女が助けてくれた。

　　b. 私はどこにも逃げようがなかった。

　　b. 私がどこにも逃げようがなかったとき，彼女が助けてくれた。

さらに，存在文の表現パターンを利用した次のような例もある。

(16)　a. ？彼女の実力には疑いようがない。

　　b. ？深い悲しみに暮れる人には慰めようがなく，見守るしかない。

　　c. ？彼らの無知，鈍感さ，傲慢さ，無責任さには救いようがない。

「疑う」「慰める」「救う」は「に」格名詞でなく「を」格名詞を従える。したがって，これらの表現が許されるのであれば，「に」格名詞が存在文から供給されると考えるのが妥当であろう。（上の例では，「に」格名詞が「疑う」「慰める」という行為をする人は指さないことに注意されたい。）

2.3　述語的であること

「しようがない」構文では，名詞「Ｖよう」が，「彼女に連絡を取りようがない」に見られるように，「に」格名詞や「を」格名詞と共起する。それでは，この事実は，特殊な構文だから許されるのか，それとも何か別の理由から出てくるのであろうか。「しようがない」構文以外に目を向けると手掛かりが見つかる。

(17)　a. あの子はお菓子 {の／を} 食べすぎだ。

　　b. あのお店は焼肉 {の／を} 食べ放題だ。

「食べすぎ」と「食べ放題」はともに「食べ」を含む複合語だが，その前に「を」格名詞があらわれることが可能である。だが，どのような環境でもそれが許されるわけではない。

(18)　a. ドーナツ {の／*を} 食べすぎが原因で病気になった。

　　b. 焼肉 {の／*を} 食べ放題が禁止になった。

(17) と (18) の違いは，「食べすぎ」と「食べ放題」が述語的に使われているかどうかということである。(17) のように文末にあらわれる場合，「を」格が許される。これは日本語の節において述語が占める位置であり，通常の述語は「を」格名詞や「に」格名詞を用いて意味関係を表す。「食べすぎ」や「食べ放題」が述語的に機能する場合，複合語内にある動詞「食べ」が述語としての力を発揮し，動詞として項を実現することができる。述語的であることが重要なので，次のような例も許される。

(19)　a. お菓子を食べすぎの子（→その子はお菓子を食べすぎだ）

　　b. 焼肉を食べ放題のお店（→そのお店は焼き肉を食べ放題だ）

「しようがない」構文は「Ｖよう」が否定表現と共起し文末の位置を占めることで，全体

として大きな述語（述部）を形成していると考えられる。そのため，その中にある動詞が項を通常の形で出現させることが可能になっていると言えよう。そこから，「を」格名詞などがあらわれることが許されると考えることができる。Sugioka（1986：101）も関連した事実を示している。

(20)　金｛の／*を｝使いようを考える。

「しようがない」構文についてさらに触れると，助詞の「は」が付いた名詞が主部となり，「Vしようがない」という表現が述部となる場合がある。（主題を含む広い意味での主部および述部を想定している。）

(21)　a. 先生たちは，彼女のレポートに文句を付けようがなかった。
　　b. 彼女のレポートは，文句を付けようがない。
　　c. あの紳士だけは，スリが財布をすりようがない。
　　d. 親からは，金を借りようがなかった。

「Vすぎ」，「V放題」，そして「Vよう」において，動詞の項が通常の文と同様にあらわれるのは，それらの表現が述部（の一部）として機能しているからだということを見た。これは，統語構造を局所的に見るのではなく，主部・述部といった意味機能面を見ることが必要であることを示唆する。換言すると，構造のどのような位置にどのような機能をもってあらわれるかを考慮に入れる必要があるということである。

2.4 「しようがない」構文の構造：形式と意味の関係

2.4.1 複合動詞の場合

「しようがない」構文の大まかな統語構造についてはすでに示したが，本小節では個別の例を見ていくことにする。まず，「に」格名詞が複合語の内部に含まれると考えるべき例が存在する。

(22)　今となっては，その商品｛の／を｝手に入れようがない。

「手に入れる」は比喩的な慣用表現であり，〈入手する；得る〉ということである。次の例を比較されたい。

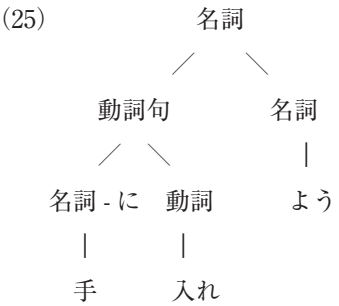
(23)　a. 彼女は力を手に入れた。
　　b. 彼女は手に力を入れた。

(24)　a. 彼はお金を手に入れた。
　　b. 彼は手に刺青を入れた。

「…を手に入れる」と「手に…を入れる」では（絶対的ではないにせよ）解釈が異なる。前者では慣用句としての解釈が優先され，後者では文字通りの意味が優先し，慣用的な解釈は出にくい。したがって，(23a) は〈彼女は権力を掌握した〉という意味であり，(23b) は〈彼女は手を握りしめた〉という意味である。(24) でも同様の違いが感じられる。ここ

から慣用表現の「手に入れる」を１つの動詞のように考えることが自然であることがわかる。そして，「手に入れよう」が次の構造をもつと仮定する。

(25)



すなわち，「手に入れようがない」における「手に入れよう」が名詞であると仮定する。これにより，「商品の手に入れよう」の「の」格名詞が，「連絡の取りよう」と同様に，説明される。(「見に行く」から成る「見に行きかた」も同様である。）語の中に句があらわれる例が日本語にあることは知られている（影山　1993：326-331)。ここでは次の例を挙げておく。

(26)　a. 野球選手らしい（体型)，学者らしい（考え方）

　　b. 野球の選手らしい（体型)，若い学者らしい（考え方）

（26）の「～らしい」は「いかにも～である」を意味する。(26a）では「らしい」は前にある語（名詞）と結び付いている。一方，(26b）では，単純な語ではなく，語の前に修飾表現を伴った名詞句と結び付いている。こうしたことから，表面的には２つの形態素が結びついたように見える複合語が，実は一方の形態素がそれより大きな構成素の一部であるという場合が日本語には存在することがわかる。「手に入れよう」もそうした構造であると考える。同じように考えれば次の表現も説明できる。

(27)　a. マイナンバーカードの手に入れかたがわからない。

　　b. マイナンバーカードは，手に入れ甲斐がありますか。

「手に入れかた」と「手に入れ甲斐」はそれぞれ語であり，名詞である。「マイナンバーカードの手に入れかた」における「の」格名詞がそう仮定することで説明できる。「手に入れる」という連鎖が特殊であり，「～かた」や「～甲斐」はふつう句を取り込むことはできない。

(28)　不審者から＊（の）逃げかた，本｛との／＊と／＊に｝出会いかた，

　　駅｛への／＊へ／＊に｝行きかた

以上，「手に入れよう」が特殊な構造であることを見た。他にも複合動詞のいくつかが同じように分析されるが，ここで見たように，「Ｖかた」と言えるかといったことが基準となろう。

2.4.2　構文間の比較

「しようがない」構文に特異なのは，主語に相当する表現が「から」句であらわれてもよいということにある。

(29)　a. 彼女に僕から真実を話しようがない。

　　b. 彼女にこちらから連絡を取りようがなかった。

ただし，この場合，「から」名詞には，起点の解釈を受けるという制約があるようである。(29a）では，真実が僕から彼女に伝わることが含意され，(29b）では，連絡がこちらから彼女に行くことが含意される。

「Ｖすぎ」は動詞「Ｖ過ぎる」と対比して議論されることが多い（由本　2012，阿久澤 2018 など)。まず名詞「Ｖすぎ」について見ていよう。

(30)　a. 高田さんは少しお酒｛の／を｝飲みすぎだ。

　　b. ２つお菓子｛の／を｝取りすぎの少年

上の「酒の飲みすぎ（だ)」と「お菓子の取りすぎ（の)」の場合，「少し」と「2つ」がそれぞれ「すぎ」とともに解釈され，「少し」と「2つ」は基準値を超える超過数量としての解釈を受ける。本稿はその立場を取らないが，「飲み」や「取り」が動詞句を形成するという仮定の問題点を指摘しておく。

(31)　a. 高田さんは［お酒を少し飲み］すぎだ。

　　b.［お菓子を２つ取り］すぎの少年

それぞれ「お酒を少し飲み」，「お菓子を２つ取り」がまず解釈を受けると，表現全体の意味とは異なったものになってしまう。事実は，高田さんがお酒を飲んだ量は多く，少年が取ったお菓子は基準となる $\alpha+2$ 個である。したがって，動詞句を仮定して分析する立場では，「少し」と「2つ」が超過数量となる解釈のみを許す説明をしなければならない。

「Ｖ放題」については，動詞を含む複合語全体の前に別の表現があらわれる場合もありそうだ。それらが自然な表現であれば，動詞句を形成して分析することは困難となろう。

(32)　a. あの店は，全国の地酒を無制限飲み放題だ。

　　b. あそこのイチゴ園は，甘いイチゴを時間制限なしの食べ放題だ。

「無制限飲み放題」は大きな複合語であり，「時間制限なしの食べ放題」は名詞句である。「飲み／食べ」が「を」格名詞と隣接していないので，動詞句を用いた分析にとっては問題となる。

上記の指摘は，動詞句による分析にとって取るに足らないことかもしれない。しかしながら，「しようがない」構文には他に観察されない奇妙な振る舞いがある。

(33)　a. 会社に事故の報告をしようがない。

　　b. 会社に事故を報告しようがない。

ここでの動詞は軽動詞「する」と「報告する」であり，それぞれ「会社に事故の報告をす

る」と「会社に事故を報告する」が自然なので，特に問題はないように見える（Grimshaw and Mester 1988，影山 1993 などを参照）。だが，次の例はどうであろうか。

(34)　a. 相手に事故原因を説明しようがない。
　　b. 相手に事故原因の説明をしようがない。
　　c. 相手に事故原因を説明のしようがない。

（34a, b）は，それぞれ「相手に事故原因を説明する」と「相手に事故原因の説明をする」が対応すると考えることができる。しかしながら，（34c）に対応すると考えられる「相手に事故原因を説明 {* の／？ を} する」は自然ではない。「を」格について「？」とするのは，影山（1993：317）に，二重「を」格が日常の口語で観察されるとの指摘があり，それを考慮している。

(35)　a. 株を譲渡した側は，何らかの見送りを期待をして，…
　　b. せっかく作った設備をどのようにして活用をしていくか，ということが問題です。
　　c. これで本日の営業を終了をさせて頂きます。

だが，ここで問題となるのは「相手に事故原因を説明のしようがない」であり，「の」格の部分である。

(36)　a. 相手に事故原因を説明のしようがない。
　　b. * 相手に事故原因を説明のする。

「* 説明のする」を複合動詞と考えることはできない。また，（36a）が「説明の」という「の」格であることから，それは「しよう」という名詞に連なると考えるのが妥当である。したがって，「説明のしよう」は名詞句であると分析されることになる。本稿では（36a）が（37a）のような構造をもつと考える。そして，それは先に見た「彼女に連絡 {を／の} 取りようがない」と同様である。

(37)　a.［$_{文}$［$_{名詞}$ 相手］に［$_{名詞}$ 事故原因］を ［$_{名詞句}$ 説明の しよう］が ない］
　　b.［$_{文}$［$_{名詞}$ 彼女］に［$_{名詞}$ 連絡］を ［$_{名詞}$ 取りよう］が ない］
　　c.［$_{文}$［$_{名詞}$ 彼女］に［$_{名詞句}$ 連絡の 取りよう］が ない］

ここから，「しようがない」構文は，軽動詞「する」と同じように分析することはできないことがわかる。

もう少し複雑な例を見てみよう。

(38)　a. 南極基地と無線で連絡 {の／を} 取りようがない。
　　b. 南極基地と無線での連絡 {の／を} 取りようがない。
　　c. 南極基地との無線での連絡 {の／を} 取りようがない。
　　d. * 南極基地との無線で連絡 {の／を} 取りようがない。（a〜c の解釈で）

（38c）はややぎこちない感じもするが，（38d）よりも容認度は高い。類似した例を挙げ

ておく。

(39)　a. 犯人と駅前でカバン｛を／の｝交換しようがない。

b. 犯人と駅前でカバンを交換のしようがない。

c. 犯人と駅前でカバンの交換｛を／の｝しようがない。

d. 犯人と駅前でのカバンの交換｛の／を｝しようがない。

e. 犯人との駅前でのカバンの交換｛の／を｝しようがない。

f. *犯人との駅前でカバンの交換｛の／を｝しようがない。

軽動詞「する」は文において主語となる「が」格名詞を必須とするが，「しようがない」構文ではそのような制約はない。したがって，意志性をもたない主語の「が」格名詞が「の」格名詞になることが可能である。

(40)　a. 自分の間違いにはなかなか気｛が／の｝付きようがない。

b. こんな僻地には電波｛が／の｝届きようがない。

c. 室外に空気｛が／の｝流れようがなかった。

主題（theme）の主語と着点（goal）の「に」格名詞を取る移動動詞の場合，後者を「への」あるいは「までの」とすることができる。

(41)　a. 交通手段が絶たれ，人々はホテルへの戻りようがなかった。

b. 回り道をする以外に，ふもとまでの行きようはなかった。

着点を表す「へ」や「まで」がない場合もある。

(42)　a. 交通手段がないので，病院の行きようがなかった。

b. 町外れにあるので，見学の行きようがなかった。

（42b）は「見学に行く」に対応する。「しようがない」構文以外での「Vよう」は通常の名詞として機能するから，「の」格だけで他の表現を繋ぐことは不思議ではない。

「と」格名詞に「の」が付くことも可能である。

(43)　a. これしか知らないので，他の機種との比較しようがありません。

b. 新しく買ったパンツは，白のシャツとの合わせようがなかった。

動詞「知る」は他動詞だが，主語に「の」格を付けることができそうだ。

(44)　a. ?その人の素晴らしさを示す記録がない限り，私たちの知りようがない。

b. ?すべてがいつ終わるのか，私の知りようもない。

以上の観察から，「しようがない」構文と軽動詞「する」をまったく同じように分析するのはむずかしいと結論する。

2.4.3　動詞「ある」との類似性

本稿の提案では，いわゆる述語と項の関係が局所的ではない。通常の文における「彼女に連絡を取る」と「彼女に連絡を取りようがない」の構造を比較しよう。

(45)　a. ［$_{動詞句}$［$_{名詞}$ 彼女］に［$_{名詞}$ 連絡］を　取る］

　　b. ［$_{文}$［$_{名詞}$ 彼女］に［$_{名詞}$ 連絡］を　［$_{名詞}$ 取りよう］が　　ない］

通常，(45a) が示すように，動詞「取る」の項（ここでは「彼女に」と「連絡を」）は，その動詞が主要部となって投射する動詞句内にある。一方，本稿の提案では，「取る（←取り）」が主要部となり動詞句を形成するとは仮定しない。それでは，どのように「彼女に」と「連絡を」に対する「取る」の関係を保証するのか。これには2つのことが関与していると考えられる。1つは，2.3節で触れたように，「しようがない」構文が述部として機能するということである。そのため，（「V放題」や「Vすぎ」と同じように）動詞としての項実現がしやすい環境になるということである。もう1つは，存在文における意味関係の示しかたが関係している。

存在文で用いられる動詞「ある」は，「が」格名詞がモノに対応する場合とコトに対応する場合がある。

(46)　a. そこに辞書がある。

　　b. 隣町で明日からお祭りがある。

興味深いのは，「が」名詞が変わることで共起する表現が変わることである。

(47)　a. 彼女と明日，｛約束／デート｝がある。

　　b. 彼女からさっきキャンセルの電話があった。

　　c. 私からあなたに｛プレゼント／贈り物｝があります。

　　d. そのパーティで，さまざまな人と出会いがあった。

　　e. 伝えたいことが｛私から／あなたに｝あります。

　　f. 彼は他人に対して｛思いやり／親切心｝がある。

　　g. 天井から｛水漏れ／漏水｝がある。

　　h. オンライン授業に対して不満がある。

　　i. 頭から出血があった。

　　j. 両国間には摩擦があった。

これらの「が」名詞は「名詞（を）する」の形で使えるものが多い（「約束をする／デートをする／キャンセルの電話をする／プレゼントをする／贈り物をする／出会いをする」）。次の例では，文あるいは動詞句が「が」格名詞に応じてあらわれている。

(48)　a. 学生からどのパソコンを買うべきか（と）相談があった。

　　b. 主張が事実と矛盾していないか（と）会場から発表者に質問があった。

　　c. ホテルに戻ると，会食は中止と友人から伝言があった。

　　d. すぐに家に帰るように（と）母から電話で連絡があった。

存在（否定）文でも同様の説明ができると本稿は考える。

(49)　a. 彼女に［$_{名詞}$ 伝えよう］が　ない

b. 彼女から［名詞 教わりよう］が　ない

「Ｖよう」において動詞は名詞の主要部でないため，この分析には問題があると考えるかもしれないが，上で見た（47c）の「贈り物」でも自然な表現となっている。さらに，（47e）の「伝えたいこと」については「*伝えたいことをする」とは言えず，このパターンが拡張して使われていることが窺える。一般に，名詞句内の意味関係を考えると，述語的要素と項的要素の関係が，動詞句内と比べ，間接的である。

(50)　a.『先生のやさしい殺し方』

b. ムカデの殺しかた

上の例において，「先生」と「ムカデ」は「殺しかた」の内部の「殺す（←殺し）」と結び付いている。（50a）は漫画のタイトルだが，「先生」は殺人鬼である（つまり「殺す」の動作主に相当する）。（50b）の「ムカデ」は私たちの常識に照らし合わせると「殺す」の被動作主である。「Ａが Ｂを殺す」と表現するため，「殺しかた」にある「殺す」に結びつけるには，名詞に単純に「の」格を用いるしかないが，他の項の場合は少し異なる。

(51)　a. 駅からの歩きかた

b. 島への渡りかた

c. 患者との接しかた

d. 授業開始までの過ごしかた

e. カードキーでの開けかた

上の例では「の」の前に別の格助詞があり，それにより意味役割が明確になる。そして，それはそれらの名詞が「Ｖかた」にある動詞と結び付いていることを示す。ここからわかるのは，意味関係が例えば動詞句内における動詞と項の名詞との関係のように常に局所的でなければならないという訳ではないということである。上で見た動詞「ある」の用法の拡張および「しようがない」構文は，形式面において，意味関係が，厳密な意味での局所的な関係ではない場合である。

先に，「しようがない」構文には，ほぼ同じ意味が異なった形式で表現可能であることを見た。

(52)　a. 彼女に連絡のしようがなかった。

b. 彼女に連絡をしようがなかった。

異なった形式に何か違いはないのだろうか。判断は微妙だが，違いはあるようだ。

(53)　a. 子どもたちが騒いでいて，まったりと休日を過ごしようがなかった。

b. ?* 子どもたちが騒いでいて，まったりと休日の過ごしようがなかった。

cf. まったりとした休日 {を／の} 過ごしようがなかった。

(54)　a. 500 円から 800 円を引きようがないとその子は考えた。

b. ?*500 円から 800 円の引きようがないとその子は考えた。

どのような原理が働いて，容認度の差が生じているかは明確にはわからないが，(53) では「まったりと」と「休日」，(54) では「500 円から」と「800 円」が統語構造において姉妹関係（sisterhood）にあるほうが自然であると言える。

2.5　否定文としての「しようがない」構文

「しようがない」構文は全体としては否定文であるから，否定文とともにあらわれる表現が許される。まず，「しか」と共起できることを確認しておこう。

(55)　a. そうとしか答えようがなかった。
　　b. 彼にしか連絡を取りようがなかった。
　　c. それしか選びようがなかった。

取り立て助詞「しか」は否定表現と共起し，さもないと不自然に感じられる。

(56)　a. 私はそうとしか {答えなかった／*答えた}。
　　b. 私は彼にしか連絡を {取らなかった／*取った}。

これらは「だけ」を用いた肯定形とほぼ同じ意味をもっている。

(57)　a. 私はそうとだけ答えた。
　　b. 私は彼にだけ連絡を取った。

だが，「しようがない」構文を肯定形にすることはできない。

(58)　a. *そうとだけ答えようがあった。
　　b. *彼にだけ連絡を取りようがあった。
　　c. *それだけ選びようがあった。

「しようがない」構文は否定表現と共起することが基本だが，それに類した修辞疑問文であらわれることもある。また，「ある」のあとに「はず」などの名詞が来て，そのあとに否定表現があらわれることもある。

(59)　a. 彼女のどこに文句を付けようがあろうか。
　　≒彼女のどこにも文句を付けようがない。
　　b. 彼女に文句を付けようがある {はず／わけ} もない。

日本語には，それ単独では意味解釈ができない不確定な（indeterminate）表現があり，その中には専ら否定文の中で用いられ，否定対極表現（negative polarity items; NPI）と呼ばれるものもある。ここで，「しようがない」構文と不確定な表現の関係を見ておこう。

(60)　彼女のことは，もう誰一人かばいようがなかった。

「誰一人」は否定の環境であらわれる NPI である。ここでは，彼女をかばう者が一人も存在しなかったことを意味する。

不確定な表現の多くは，否定表現と呼応して解釈される場合，助詞「も」を必要とする。

(61)　a. 私はその本を誰に*（も）貸さなかった。

b. 私はそのお店で何 {も／*を} 買わなかった。

「しようがない」構文でも同様の振る舞いが観察される。さらに，それに加えて，（62b）のような表現も許される。

(62) a. 彼の問いは，誰にも答えようがなかった。

b. 彼の問いは，誰に答えようもなかった。

（62b）では，不確定な表現「誰に」に「も」が直接的に付いておらず，後続する「答えよう」に付いている。これは次の例とは事情が異なる。

(63) 彼の問いは，どの学生も答えようがなかった。

この場合，「も」は不確定な表現「どの」を含む「どの学生」という構成素に付いている。一方，（62b）の場合，「誰に答えよう」は構成素を成さない（と本稿は仮定してきた）。不確定な表現自体には「も」が付かず，その後の表現に「も」が付いていることに注意されたい。否定文におけるこのような現象は Kishimoto（2001）が指摘している。

(64) a. 太郎は誰にも相談をしなかった。

b. 太郎は誰に相談もしなかった。

まず，（64b）がいま問題としている例と類似していることを確認し，そのうえで，次の例を見てみよう。

(65) a. 誰にも文句を言いようがなかった。

b. 誰に文句も言いようがなかった。

c. 誰に文句を言いようもなかった。

Kishimoto（2001）は，派生的文法モデルを用い，LF という意味の計算を行なう統語表示レベルで，「も」が付いた X^0 の語が高い位置に編入され，「も」の領域が拡がると考える。そして，その「も」の領域の中に，不確定な表現が含まれていれば，適切な解釈を受けると主張する。本稿では，上の例における「誰に」と「文句を」と「言いよう」は 1 つの構成素を成さないと仮定するので，LF での編入でこれらの例が同様に説明できるかは不明である（特に（65b, c）の例）。また，X^0 でない句（phrase）は編入ができないと Kishimoto は仮定するので，（65b）に似た次の例は Kishimoto のような分析法にとっては問題となろう。

(66) 誰に何の文句も言いようがなかった。

以上から，「しようがない」構文が，取り立て助詞「も」について見せる現象は，この構文独特のものではなく，他の表現を含めて言語理論の中で説明すべき事項であることがわかった。（「付録」も参照されたい。）

2.6 まとめ

第 2 節では「しようがない」構文がもつ特性について見た。そのいくつかについては日本語の他の現象と共通の部分があり，統一的に説明されることが求められる。その一方で，

「しようがない」構文に独特の現象もある。

(67)　a. いまの彼には，白羽の矢 {が／の} 立ちようがない。

　　b. いまの彼には，白羽の矢 {を／の} 立てようがない。

この例が示すように，「しようがない」構文では，表面的に見て，「が」格を「の」格に，「を」格を「の」格に変えても問題がないように見える。だが，動詞「立つ／立てる」を主要部とする動詞句が存在すると考えると「* 白羽の矢の立つ」「* 白羽の矢の立てる」という不自然な構成素を仮定することになってしまう。これが「しようがない」構文が提起するひとつの問題だと言える。

本稿では，「Vよう」を名詞と考え，動詞「ある」を基盤として，「Vよう」の中の動詞と関係する項が文の中で「Vよう」の外の位置にあらわれると仮定した。結果としての構造は，「しようがない」構文特有のものになると考えられる。

3. 通時的考察

本節では，「しようがない」構文を歴史的な観点から簡単に考察する。現代日本語における「しようがない」構文は，動詞の連用形と「よう」から成る「Vよう」とそれに続く否定表現からできている。この構文がいつ頃，確立したのか，構文の部分はどのように変化したのかなどについて観察する。

3.1 「よう」

辞書を活用し，「よう」について見てみよう。「よう（様）」は旧仮名遣いで「やう」だが，『精選版　日本国語大辞典』の［語誌］によると，「よう」は「漢語とみるのが一般的だが，和語とみる説もある」とある。また，「上代には見えず，中古以降盛んに用いられた」とのことである。意味・用法は，名詞としては大きく3つに分かれ，1.「物事のありかた」を意味する純粋な名詞，2. 形容動詞に準じた用法，3. 形式名詞の用法が記されている。1. の「物事のありかた」はいくつかに分類され，①には「様子。目に見える状態。ありさま」が挙げられている。本稿で扱っている「しようがない」構文と関係するのは，⑤に記されている「ある事を実行するための方法。やり方。てだて。手段」である。③の「外見にこめられた意味。子細。わけ。事情。道理。『ようあり』の形で用いられることが多い」というのも⑤に関連すると言えよう。それぞれに文献上で初とされる用例が載っているので，それを下に示す。

(68)　a. ① 様子。目に見える状態。ありさま。

　　※宇津保（970-999頃）俊蔭「父母，『いとあやしき子なり。おひいでむやうを見む』とて，ふみもよませず」

b. ③ 外見にこめられた意味。子細。わけ。事情。道理。「ようあり」の形で用いられることが多い。

※竹取（9C 末-10C 初）「死に給ふべきやうやあるべき」

c. ⑤ ある事を実行するための方法。やり方。てだて。手段。

※竹取（9C 末-10C 初）「其山を見るにさらにのぼるべきやうなし」

（68c）の用例は「その山を見ると（険しくて）まったく登れるようではない」という意味であり，「しようがない」構文と通じるものがある。本稿では，「V べきやうなし」という形式が「V しようがない」という形式の先駆けであったと考えることとする。

3.2 「V べきやうなし」

「べき」は助動詞「べし」の連体形であるが，名詞「やう」に連なる。また，「べし」の前に接続する動詞は終止形である。この「V べきやうなし」という形式においては，「やう」が文を従えていたと考えることができる。他の文献からの例も挙げておこう。

（69）『枕草子』（平安時代）

a. 遅からむ車などは，立つべきやうもなし

（現代語訳）遅く着くような牛車は，停められそうもない

b. ゐるべきやうもなくて，立ち明かすも，なほをかし

（現代語訳）座る場所もなくて，外に立ったまま夜を明かすのも，風情がある

（70）『平家物語』（鎌倉時代）

a. 車におくべきやうもなし

（現代語訳）車に置いておくこともできない

（71）『徒然草』（鎌倉時代末期）

a. 分け入りぬべきやうもなし

（現代語訳）かき分けて入って行けそうもない

b. おう弱の官人，たまたま出仕の微牛をとらるべきやうなし

（現代語訳）力のない役人が，たまたま出仕の時に用いた貧弱な牛を取り上げられねばならない理由はない

（72）『花月草紙』（松平定信 1796～1803 作）

今は命つなぐやうもなし

（現代語訳）今はもう命を絶えないように保つ方法もない

（73）『北川蜆殻（ほくせんしじみのから）』（江戸後期）

どふも返事のしやうもなし

（現代語訳）どう考えても返事ができない

（72）と（73）は「べし」がないが，「しようがない」構文と関係あると考えられるので挙

げておく。やや乱暴な言いかたになるが，古くは，「Ｖべきやうなし」という形式が普通に使われていたと考えられる。この形式は現代語では不自然に感じられるが，少しあとで見るように，明治期に入って，「しようがない」構文に取って代われられると見なすことができる。

3.3 「Ｖよう」

動詞の連用形と「よう」の組み合わせを見ておく。上で見た『精選版　日本国語大辞典』では「語素」として扱われ，①名詞に付く用法と②動詞の連用形に付く用法に分けられている。「しようがない」構文に関連するのは②である。

(74)　② 動詞の連用形に付く。そうする方法，その動作のやり方。
※平家（13C 前）四　道ゆき人が立ちとどまって，「はしたなの女房の溝の越えやうや」とて

用例は「道を行く人が見て立ち止まって，『行儀が悪いなあ，女が溝を飛び越える様子は』と言って」を意味する。「越えやう」が「Ｖよう」に相当する。

『学研 全訳古語辞典』では接尾語として「－やう【様】」の項が立てられている。

(75)　②〔活用語の連用形に付いて〕…の仕方。…の具合。▽方法や様態を表す。
出典徒然草　五五「家のつくりやうは，夏をむねとすべし」
［訳］家の造り方は，夏（に暮らしやすいこと）を主とするのがよい。

先の「Ｖべきやうなし」と比べると，「Ｖよう」の出現は遅いのかもしれない。少なくとも，お互いに独立して存在しており，現代日本語のような「Ｖようがない」の形式は古くからは使われなかったと考えられる。

『精選版 日本国語大辞典』には，慣用句「しようがない」の項がある。説明は次の通りである。

(76)　「しようがない」（「しよう」が「しょう」と発音されることもある）
① なすすべがない。よい方法がない。
※捷解新語（1676）四「なにともしやうかなさに，たいくゎんとももいろいろにおもゑども」
※魔風恋風（1903）〈小杉天外〉前「だって，外に詮様（シヤウ）が無いんですもの」
② 始末におえない。手に負えない。あつかいに困る。
※松翁道話（1814-46）一「子供の時から大家にうかうか暮したものは，どうも仕様のないものぢゃ」

さて，それではどのようにして「Ｖようがない」という形式が生まれたのであろうか。

3.4 「Vべきやうなし」から「Vようがない」へ

現代日本語において，助動詞「べし」にはかつての勢いがなく，『広辞苑　第七版』には「口語では，論理的な固い感じの文章や慣用的な表現で用いられる」と添えられている。かなり長くなるが，『精選版 日本国語大辞典』の情報を記す。ほとんど用法の多くについて，初出がずっと昔であることがわかるだろう。

(77)　「べし」〖助動〗（活用は「○・べく・べし・べき・べけれ・○」。
補助活用は「べから・べかり・○・べかる・○・○」。形ク型活用。文語で，活用語の終止形に付く。ただし，ラ変型活用の語には連体形につき，また，古く上一段活用の語には連用形についた。→語誌）推量の助動詞。
① よろしい状態として是認する意を表わす。
（イ）適当であるという判断を表わす。…するのがふさわしい。…するのがよい。
※万葉（8C 後）三・三三八「験（しるし）なき物を思はずは一杯（ひとつき）の濁れる酒を飲む可（べく）あるらし」
※枕（10C 終）八七「一日（ついたち）などぞ言ふべかりけると下には思へど」
（ロ）当然のこととして，義務として判断する。…するはずである。…しなければならない。
※万葉（8C 後）二・一六六「磯の上に生（お）ふるあしびを手折らめど見す倍吉（ベキ）君が在りと言はなくに」
※竹取（9C 末-10C 初）「物一言言ひ置くべき事ありけり」
（ハ）他人の行動に関して，勧誘・命令の意を表わす。打消を伴えば禁止となる。…しなさい。…するのがよい。
※万葉（8C 後）二・一二八「わが聞きし耳によく似る葦の末（うれ）の足痛（ひ）く我が夫（せ）勤めたぶ倍思（ベシ）」
※今昔（1120 頃か）二五「帝王の位に至る事は，此天の与る所也。此の事吉く思惟し可給（たまふべ）し」
② 確信をもってある事態の存在または実現を推量し，または予定する。
（イ）近い将来，ある事態がほぼ確実に起こることを予想する。きっと…だろう。…するにちがいない。
※古事記（712）下・歌謡「天飛（あまだ）む 軽の嬢子（をとめ）甚（いた）泣かば 人知りぬ倍志（ベシ）」
※土左（935 頃）承平四年一二月二七日「汐満ちぬ，風も吹きぬべし」
（ロ）目の届かない所で，現在進んでいる事態を断定的に推定する。…しているにちがいない。…しているはずだ。
※万葉（8C 後）八・一五一四「秋萩は咲きぬ可有良（べから）し我が宿の浅茅が

花の散りぬる見れば」

※源氏（1001-14 頃）帚木「この障子口すぢかひたる程にぞ伏したるべき」

（ハ）近い将来に事態の実現を予定する。…する予定である。…であることになっている。

※万葉（8C 後）一八・四〇四二「藤波の咲きゆく見ればほととぎす鳴く倍吉（ベキ）時に近づきにけり」

※源氏（1001-14 頃）桐壺「今日はじむべき祈りども，さるべき人々うけ給はれる」

（ニ）自己の行動に関して，強い意志を表わす。ぜひ…しよう。きっと…しよう。

※万葉（8C 後）一七・三九五一「ひぐらしの鳴きぬる時は女郎花（をみなへし）咲きたる野辺を行きつつ見倍之（ベシ）」

※徒然草（1331 頃）九二「毎度ただ得失なくこの一矢に定むべしと思へ」

③ 可能であるとの判断を表わす。…することができる。…できそうだ。

※万葉（8C 後）五・八一七「梅の花咲きたる苑の青柳はかづらにす倍久（ベク）なりにけらずや」

※源氏（1001-14 頃）空蟬「さりぬべき折見て対面すべくたばかれ」

④（連用形「べく」を用いて）行為の目的を表わす。…ために。現代の用法。

※肱の侮辱（1907）〈国木田独歩〉「午後四時の汽車に間に合ふべく，停車場へ急ぎました」

いちばん最後の用例のみが 20 世紀のものであり，新しい用法と言える。現代日本語においては，（「～，おそるべし！」や漫画『あしたのジョー』に出てくる「やや内側を狙い，えぐり込むように打つべし」のような命令の「～すべし！」などは別として）文末が「べし」で終わる形式を見かけることは滅多にない。

上の［語誌］に次のような記載がある。

(78)　(3) 現代語では，連用形「べく」と連体形「べき」が使われる。

「べく」は④の用法のほか，①（ロ）の意の特殊な場合と見られる用法がある。「道草〈夏目漱石〉三四」の「彼は自分のため又家族のために働らくべく余儀なくされた」など。また，「べき」は，多く①（ロ）の意で「…すべきである」などと用いるが，「浮雲〈二葉亭四迷〉二」の「ヤどうも君も驚く可き負惜しみだな」のように，情意に関する動詞に付く場合も多い。「悲しむべき事態」「恐るべき子ども」など。

かつての「V べきやうなし」に見られた「V べきよう」はなぜ現代日本語では使用されないのだろうか。かつての表現は「文＋やうなし」（文末が「べき」）という形式であり，「よう（やう）」が文と結びついていた。ところが，新しい用法（厳密には前からあった「動

詞の連用形＋よう」を借りる形式）では「語＋よう」となった。そして，「V べきやうなし」から「V ようがない」への移行には，「べし」の衰退が大きく関わっていると考えられる。「べし」の衰退により，「V べきやうなし」という表現形式を失うということは，言語の表現力を失うことに繋がり，今まで表現できたことが表現できなくなるということである。そしてそこには，形式を何らかの形で残そうという力が働くかもしれない。その結果として，「しようがない」構文が誕生したと本稿は考える。それでは，その誕生はいつごろだったのか。上の［語誌］にある例が示唆するように，それは明治期以降であると考えられる。

現代の日本語話者に，「責任 ｛の／を｝ 取りようがないぞ」の代わりに「* 責任を取るべきようがないぞ」と言っても通じないであろう。だが，「V べきやうなし」から「V ようがない」に取って代わられたと考えるならば，その境目となる時期があるはずだ。明治時代は 1968 年に始まるとされるが，その頃，生まれた人たちの書き物を観察すると，その変化に相当するものがあったことがわかる。

3.5　明治期以降の「V べきよう」の実例

『Aozora Bunko：青空文庫検索』（https://www.joao-roiz.jp/AOZORA」では，基本的に著作権の切れた文学作品などを対象に文字列で検索することができる。「V べきようなし」に準ずる形が 12 例ほど見つかった。まず，それらを次に示す。

(79)　a. 福沢諭吉（1835-1901）『学問の独立』
今日は時勢もちがい，かかる奇話<u>あるべきようもなし</u>といえども，
b. 三遊亭圓朝（1839-1900）『後の業平文治』（鈴木行三校訂編纂）
と一番高い樹きに登って四辺あたりを見廻しましたが，眼に遮さえぎるは
草木ばかりで<u>人家のあるべき様（よう）もござりませぬ</u>。
c. 穂積陳重（1855-1926）『法窓夜話 02』
この災害は汝自身の不注意から自ら招いたものであるから，今更
<u>誰を怨むべきようもない</u>と罵って，
d. 宮崎湖処子（1864-1922）『空家』
かくなることとは露知らざりしも，かくなる上はわれが殺せしと言わるるとも
<u>言い開くべきようなし</u>，悲しいかなやんぬるかなと，
e. 幸田露伴（1867-1947）『連環記』
路にておろかにも其（そ）を取りおとして失い，さがし求むれど似たるものも
なく，<u>いかにともすべきようなく</u>て，
f. 三宅花圃（1869-1943）『藪の鶯』
口に出いだしていうほどなれば。もとより<u>そのいうことをきくべきようはなし</u>。
g. 岡本綺堂（1872-1939）『半七捕物帳』

ここらの土地の姿は明治以後著しく変ってしまって，殆ど昔の跡をたずぬべきようも無いが，

h. 蒲原有明（1875-1952）『夢は呼び交す』

この浅草行は鶴見たち二人にとって異存のあるべきようはなかった。

i. 柳田国男（1875-1962）『遠野物語』

深夜にその娘の笑う声を聞きて，さては来てありと知りながら身動きもかなわず，人々いかにともすべきようなかりき。

j. 吉川英治（1892-1962）『鳴門秘帖 02 江戸の巻』

かれが一頃野望の爪を研とぎぬいていた甲賀家の財宝は焼け尽し，お千絵様そのものは，恋すべきようもない乱心の人となっている。

k. 林不忘（1900-1935）『丹下左膳 01 乾雲坤竜の巻』

見え来らざれば洗うべきようもなし。

l. 林不忘（1900-1935）『丹下左膳 01 乾雲坤竜の巻』

これによりて奉行あまりに賢人ぶりいたせば，沙汰もならず物の穿鑿（せんさく）すべきようもなし――と。

否定表現は「なし」と「ない」が混在している。(79c) の「誰を怨むべきよう」と (79 g) と「昔の跡をたずぬべきよう」では，「を」が出現しているので，「よう」が「～べき」という文を従えていると考えることができる。(79b) の「人家のあるべき様（よう）」と (79h) の「異存のあるべきよう」では，主語に「の」がついているが，「時間 {が／の} ある場合」に見られる「ガ／ノ交替」の可能性もあるから，この例から「あるべきよう」が名詞であると判断はできない。その一方，(79l) の「物の穿鑿すべきよう」は「物を穿鑿する」に対応するので，「の」格の出現から「穿鑿すべきよう」を名詞と見なしていると考えることもできる。次の小節では，(79e) にある幸田露伴に絞って取り上げる。

3.6 幸田露伴

幸田露伴の他の作品を見ると，「Vようがない」という形式が見られる。

(80) a.『五重塔』(1892)

a-1. それも道理であつて見れば傍（わき）から妾の慰めやうも無い訳，嗚呼何にせよ目出度う早く帰つて来られゝばよいと，

a-2. 相手は恩のある源太親方，それに恨の向けやうもなし，

b.『貧乏』(1897)

仕様が無いネエ，どうかしておくれで無くっちゃあわたしももうしようもようも有りゃあしないヨ。

c.『雁坂越』(1903)

源三が懐（いだ）いているこういう秘密を誰から聞いて知ろうようも無いので
あるが，お浪は偶然にも云い中（あ）てたのである。

d.『蒲生氏郷』（1925）

d-1. 骰子（さい）の目が三度も四度も我が思う通りに出ぬものである以上は
勝てようの無いことは分明だ。

d-2. 政宗は忌々（いまいま）しかったろうが理詰めに押されて居るので
仕方が無い，何様（どう）しようも無い。

e.『魔法修行者』（1928）

いってお稲荷様が狐つかいに関係のあろうようはないから，

f『雪たたき』（1939）

今時分，人一人通ろうようは無い此様（こん）なところの雪の中を，何処を
雪が降っているというように，

g『鵞鳥』（1939）

もう繕（つくろ）いようもどうしようも無い，全く出来損じになる。

h『連環記』（1941）

h-1. 何としようも無く当惑したが，飽（あく）まで俗物だから，
俗にくだけて打明け話に出た。

h-2. れに対し反対の仕ようは無いから，一方は黙っていたに違いない。

h-3. 牛にさえ馬にさえ悲憐（ひれん）の涙を惜まぬ保胤である，若い女の
苦しみ泣いているのを見て，よそめに過そうようは無い。

h-4. さがし求むれど似たるものもなく，いかにともすべきようなくて，

「V べきよう」の（80h-4）は先に示した例である。「V べきよう」の場合，動詞は終止形だが，「V よう」においては通常は連用形である。その観点から上の例を見ると，注目すべきものがある。すなわち，（80c）の「知ろうようも無い」，（80d-1）の「勝てようの無い」，（80e）の「関係のあろうようはない」，（80f）の「人一人通ろうようは無い」，（80h-3）の「過そうようは無い」における動詞は連用形ではない。このうち，「勝てよう」の「勝て」は，命令形（あるいは古語の已然形）ではなく，可能の「勝てる」の連用形であろう。一方，「勝てよう」を除くと，動詞は「知ろう」のような「未然形＋う」を基にした推量・意志・勧誘の形である。これらの２つについて少し見ておこう。

動詞が可能の形になり，その連用形が「よう」の前にあらわれる例は他にも見つかる。

（81） a. 夏目漱石（1867–1916）『坑夫』

もちろん話したくったって，知らないんだから，話せようもないんだが，
こうまで手っ取り早く片づける了簡（りょうけん）とは思わなかった。

b. 徳田秋声（1872–1943）『足迹』

子供を持ったことのない叔母には，その気持の受け取れようがなかった。

c. 徳田秋声（1872-1943）『仮装人物』

しかし葉子の愛情に信用の置けようもないので，怒る張合いもなかった。

d. 泉鏡花（1873-1939）『卵塔場の天女』

華族の後家の退屈凌（しの）ぎなんか弟子には取らない。また取れようもないわけなんだ。

e. 宮本百合子（1899-1951）『獄中への手紙 05 一九三八年（昭和十三年）』

益科学性をたかめ，真実のために没我でなければ，文学のプログラムの真髄はつかめようもない。

「しようがない」構文は「～できない」という意味だから，動詞が可能の形であらわれてもそれほど違和感を覚えない。現代日本語でも，以下のような表現が見つかる。（実例を基にした作例である。話者により，判断に違いがあるかもしれない。筆者の判断だと「？」であり，完全に不自然ではないが，どこか引っかかるところがある。）

(82) a.（？）こんなに慌ただしいのに，普通の生活など送れようがない。

b. ？そんな無責任な経営者には，全責任を取れようがない。

c. ？怒りを鎮めないことには，おいしいお茶など飲めようがない。

d. ？このゲームのボスキャラは強敵すぎて，どうやっても殺せようがない。

e. ？このように騒がしいカフェでは静かでゆったりした時間を過ごせようがない。

完全に容認されないにしても，「*飲むようがない，*飲めるようがない」よりは明らかに容認できる。加えるならば，可能の意味が含まれている「～できる」を基にした「コントロールできようがない，真似できようがない，納得できようがない，拒否できようがない」なども見受けられる。（これらについても，筆者の判断は「？」である。）

他方，「知ろうようがない」のような形は，現代日本語においては容認されないであろう。しかしながら，明治期の書き物には，こうした形が見つかる。

(83) a. 三遊亭圓朝（1839-1900）『菊模様皿山奇談』（鈴木行三校訂・編纂）

彼（あ）の節は何ともお礼の申そうようもございません，

b. 三遊亭圓朝（1839-1900）『菊模様皿山奇談』（鈴木行三校訂・編纂）

恐れ入りましたな，何ともお礼の申そうようはございません，

c. 三遊亭圓朝（1839-1900）『菊模様皿山奇談』（鈴木行三校訂・編纂）

誠にどうも此の度たびは何とも申そうようもない次第で，

d. 高村光雲（1852-1934）『幕末維新懐古談 45 竜池会の起ったはなし』

ですから，どういう人たちがどんなことを話したり，論じたりしているかなどは知ろうようもない。

e. 森鷗外（1862-1922）ゲーテ『ファウスト』の翻訳

言おうようの無い奴だ。

f. 二葉亭四迷（1864-1909）ガルシン『四日間』の翻訳

だが，母もマリヤもおれがこう死（もがきじに）に死ぬことを風の便（たより）にも知ろうようがない。

g. 泉鏡花（1873-1939）『白金之絵図』

他（ほか）に縋（すが）ろうようがない。

h. 泉鏡花（1873-1939）『天守物語』

夫人　何と申そうようもない。

i. 泉鏡花（1873-1939）『吉原新話』

トふわりと起（た）ったが，その烏の死骸をぶら下げ，言おうようの無い悪臭を放って，

j. 木暮理太郎（1873-1944）『望岳都東京』

小仏峠の真上に当って特有なピラミッド形に儼然（げんぜん）と雪の姿を顕（あらわ）して居るのは，紛うようも無い荒川岳である。

k. 柳田国男（1875-1962）『雪国の春』

かえってこの紀行の流布を妨げた形のあったのは，この親切なる平民生活の観察者に対して，言おうようもない不本意なことであった。

l. 薄田泣菫（1877-1945）『艸木虫魚』

なぜといって，今気がついたことだが，あすこに真赤に熟しているのは，まがうようもない渋柿だからである。

m. 長谷川時雨（1879-1941）『一世お鯉』

その折お鯉は何事も思うままで，世の憂きことなどは知ろうようもないと思われた時代である。

n. 中里介山（1885-1944）『大菩薩峠 22 白骨の巻』

ああ，この痛々しい足どり――だが，今となっては誰を怨（うら）もうようもあるまい。

o. 芥川竜之介（1892-1927）『さまよえる猶太人』

罪を罪とも思わぬものに，天の罰が下ろうようはござらぬ。

p. 橘外男（1894-1959）『墓が呼んでいる』

聞いているうちに私は，何ともかともいおうようのない気がしてきたのです。

「知ろうようがない」のように推量形を用いることは，「しようがない」構文が行為の可能性がないという認識を述べていることから考えて，不自然なことではない。そうではあるが，現代日本語話者にとっては極めて不自然に感じられる。

以上の考察から，「V べきやうなし」という形式が消滅しようとするときに，その時代の

人たちはその構文を何らかの形で（無意識的であったにせよ）保持しようとしたのではないか。その場合，要となる「よう」と動詞を結びつける必要があり，上で見たように，可能形の連用形や動詞の推量形が試されたのではないか。後者は最終的に不採用となり，実際に選ばれたのは，古くからある「動詞の連用形＋よう」の形であった。「しよう｛が／も｝ない」という慣用表現は否定形であることから共通点もあり，この表現が「連用形＋よう」の使用を促したのかもしれない。

3.7　三遊亭圓朝

三遊亭圓朝（1839–1900）は，江戸時代から明治時代への転換期に活躍した落語家である。圓朝の語り口は，二葉亭四迷などに影響を与え，言文一致を促進したとされている。本小節では，圓朝の噺の中にどのように「しようがない」構文が使われているかを見る。とりわけ，「Ｖよう」の動詞にどのような形式を使い，接続しているかを観察する。

まず，「しようがない」に類する表現がよく見られる。

(84)　『業平文治漂流奇談』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

a. お村はんが否（いや）だと云うならどうも<u>しようがない</u>

b. 殊（こと）に押詰（おしつま）った年の暮で<u>しようがない</u>が，

「Ｖよう」の動詞と結び付ける場合，「の」格名詞の場合が多い。

(85)　『業平文治漂流奇談』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

a. 此の度（たび）の事には実に呆（あき）れ果てまして何（なん）とも<u>お詫の</u>しようがございません

『怪談牡丹灯籠』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

b. 家来だからあんなに疑（うたぐ）ってもよいが，外（ほか）の者でもあっては己が<u>言訳（いいわけ）の</u>しようもない位な訳で，誠に申しわけがない

『霧陰伊香保湯煙』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

c-1. 何とも<u>お礼の</u>申上げようがございません

c-2. 中々<u>お金の</u>返しようもございません

『根岸お行の松 因果塚の由来』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

d. 何分にも<u>手の</u>付けようがありません。

『闇夜の梅』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂）

e. 田舎の事（こッ）たから，何も外に<u>御馳走の</u>仕ようが無（ね）えから，

『粟田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

f-1. 今更死んだ者の<u>心の</u>解けようも<u>機嫌の</u>直りようもねえから，とやかく云わずに早く帰（けえ）れ

f-2. 怨みが晴れなけりゃア<u>仏さまの怨みの</u>晴れようはないわけだと

申しまするので，

f-3. 当人が腹を切らなくても，後（うしろ）に突殺す奴が来て居るから，

稲垣小三郎の生命（いのち）の助かりようは御座いません。

項と見なせる要素に「の」格がない例は次の通りである。

(86)　『粟田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

a-1. 汝（われ）ような鬼とも蛇（じゃ）ともいいようの無（ね）え悪党の子を持った己（おれ）は，何うもお両人（ふたり）さまに済まねえからよ，

a-2. 何んてハア何うも，呆れるとも呆れねえともいいようのねえ野郎で，

a-3. 誠に親不孝な奴で，皆さまへも何ともハヤ申そうようのない不忠でございまして相済みません，

『霧陰伊香保湯煙』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

b. まアどうも狗（いぬ）とも畜生とも云いようのない此様こんな悪人を

『鹽原多助一代記』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

c-1. 実に畜生とも何とも云いようのない行いではがんせんかえ，

c-2. 何処へも行（ゆ）きようがねえ

c-3. 既に私も此の子も助かりようのない所へ北牧村（きたむくむら）の百姓清左衞門（せいざえもん）という人が通りかゝり，

『後の業平文治』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

d. じっと辛抱して，いよ／＼となったら突いてくれようと身構えて居りまする其の恐ろしさは何（なん）に喩（たと）えようもございませぬ。

『松の操美人の生埋 俠骨今に馨く賊胆猶お腥し』

（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

e. 今貴方が御不承知では先方へ私（わたくし）が何とも云いようがございません

『怪談牡丹灯籠』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

f. 是ばかりは神にも仏にも仕ようがないので，

g. 家来だからあんなに疑（うたぐ）ってもよいが，外（ほか）の者でもあっては己が言訳（いいわけ）のしようもない位な訳で，誠に申しわけがない

（86f）では，「に」格名詞があらわれている。（86 g）は，「己が」が主部で，「言訳のしようもない」が述部の可能性もある。これに対し，（86e）は「私が」の前に「先方へ」があるので，「先方へ私が何とも云いようがございません」全体が構成素を成していると考えてよいだろう。気になるのは（86c-1）の「畜生とも何とも云いようのない」における「何とも」という表現である。「畜生とも」と同じように「と」格があらわれているので，動詞「言う（云う）」と結び付けて考えたが，「何とも」のような強調表現は他にも観察される。

(87)　『業平文治漂流奇談』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）

a. 此の度（たび）の事には実に呆（あき）れ果てまして何（なん）とも
お詫のしようがございません
『粟田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）
b-1. 実（じつ）に何（ど）うも云（い）ひやうのない貴方（あなた）は
冥加至極（みやうがしごく）のお身（み）の上（うへ）でげすな。
b-2. 何うなったの斯（こ）うなったのと，実に何（なん）とも彼（か）とも
云いようのねえ怖（こえ）えことだが，
b-3. ズブ／＼と突かれた時の苦しさは，何（なん）とも彼（か）とも云いようが
ありません
『霧陰伊香保湯煙』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）
c-1. 何共（なんとも）お礼の為（し）ようがない
c-2. どうもしようがねえたって，挽けねえものア仕かたがねえ
『真景累ヶ淵』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）
d-1. 眼は一方腫塞（はれふさ）がって，其の顔の醜（いや）な事と云うものは
何（なん）とも云いようが無い。
d-2. 何（ど）う斯（こ）うと云った処が何うしても仕ようがねえ，
『根岸お行の松 因果塚の由来』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）
e. さア左様なるといよ／＼情は濃くなって何うにも斯うにも仕ようがなくなる。
『後の業平文治』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）
f. いや皆の衆，予（かね）て覚悟とは申しながら，何（なん）とも彼（か）とも
申しようのなき心配をいたしました
『文七元結』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）
g. 何（なん）とも何（ど）うもお礼の申上げようがございません
『松と藤芸妓の替紋』（三遊亭圓朝，鈴木行三校訂・編纂）
h. 何も褒めようが有りませんから，二枚折（おり）の屏風の張交（はりまぜ）を
褒めようと思って見ると，

最後の例は，文脈および形式から「何も」は「褒める」の目的語に相当すると考えられる。上の例からわかるのは，「の」格がない場合，「何」などを含む不確定な表現が否定表現と相まって強意として使われているということである。つまり，明確な要素を「Vよう」の動詞の項として明示的に示すのではなく，強意の表現としてぼんやりと出現しているということである。「しようがない」構文は動詞「ある」（の否定）が基盤となるが，自動詞「ある」と「を」格名詞は通常，共起しない。だが，（87h）のような「何も」の形だと比較的すんなりと「ある」と一緒にあらわれることができるようである。これらのことを考慮すると，「しようがない」構文に，いきなり「手を付けようがない」に見られるような「を」格名詞があ

らわれたのではなく，まずは「何とも言いようがない」に見られる「何とも」のような表現があらわれ，「Vよう」の動詞と結び付けられたと言えるのではないか。

3.8 「しようがない」構文と「を」格名詞の表出

現代日本語においては，「手の付けようがない」も「手を付けようがない」も容認度に差がないように感じられる。一方，上の議論では，動詞「ある」が中心となる（否定）文と「を」格は相性が悪いことを示唆した。それでは，「しようがない」構文が使い始められたと考えられる明治期以降について調べてみるとどのような結果が出るであろうか。『Aozora Bunko：青空文庫検索』で，「{の／を} 付けようがない」を基本とする表現と「{の／を} しようがない」を基本とする表現を検索してみた。その結果から結論できるのは，「…を付けよう」がほとんど見つからず，「…の付けよう」が多いということである。まず，「…を付けようがない」から見てみよう。

(88)　掃除の手をつけようもない。『みみずのたはこと』（徳冨蘆花 1868-1927）

上が唯一の「を」格名詞の例である。これに対して「の」格名詞は（翻訳を含め）80 例以上，見つかる。

(89)　a. 正直のところ文句（もんく）の附けようがねえ 『坑夫』（夏目漱石 1867-1916）

b. さびしい雨の音をきいていると，過去の青年時代を繞（めぐ）りに繞ったような名のつけようのない憂鬱（ゆううつ）がまた彼に帰って来る。
『夜明け前 第一部下』（島崎藤村 1872-1943）

c. 手のつけようがありますまい。『草迷宮』（泉鏡花 1873-1939）

d. 信一郎は，たゞ青年の上半身を抱き起してゐるだけで，何（ど）うにも手の付けやうがなかつた。『真珠夫人』（菊池寛 1888-1948）

e. 男でも女でも同じように，嘘（うそ）はいうし，欲は深いし，焼餅（やきもち）は焼くし，己惚（うぬぼれ）は強いし，仲間同志殺し合うし，火はつけるし，泥棒（どろぼう）はするし，手のつけようのない毛だものなのだよ……
『桃太郎』（芥川竜之介 1892-1927）

「… {を／が} しようがない」についても同様である。「…をしようがない」に類する例は見つからなかった。他方，「…のしようがない」に類する表現は 80 例近く見つかった。

(90)　a. しかし所見は松山と同じで，この上手当のしようはないといった。
『渋江抽斎』（森鷗外 1862-1922）

b. 人間世界の善悪が，善悪の外に立つ神の世界の恋に影響のしようがない。
『恋』（正岡子規 1867-1902）

c. 一人ぼっちになってしまったようで，我慢のしようもなく涙が出た。
『碁石を呑んだ八っちゃん』（有島武郎 1878-1923）

d. 次郎は，そう言われただけでは，むろん返事のしようがなかった。

『次郎物語 第一部』（下村湖人 1884-1955）

e. お由羅には，見たこともない夫人へ，同情のしようがなかった。

『南国太平記』（直木三十五 1891-1934）

「を」格名詞と「の」格名詞の用例数の差は偶然ではないと考えるのが妥当であろう。もしそうであれば，それは何を示唆するのだろうか。それは，「Vよう」を「を」格と繋げるよりも「の」格と繋げるほうが自然だと感じられたということではないだろうか。すると，「Vより」全体が名詞として機能し，その名詞に繋げるために「の」格名詞を使ったということではないだろうか。興味深いのは，（90b）と（90e）で，それぞれ「に」格名詞と「へ」格名詞があらわれていることである。

以上の議論から，「Vよう」の動詞の項と見なせる要素であっても，接続する格によって出現の度合いが異なる可能性が見えてくる。「しようがない」構文が生まれた初期においては，特に「を」格名詞はあらわれにくかったと考えられる。これは「を」格名詞が他動詞との結び付きが強く，通常は隣接した位置で動詞にC統御されるという局所的な関係にあることを要求されるからかもしれない。（また，存在文の基本の動詞「ある」が自動詞であることも関係しているだろう。）「Vよう」が名詞であるとすると，「を」格名詞と動詞がそうした構造関係をもつことはできない。また，項となる「が」名詞について考えると，「が」格名詞の出現は通常，主語に対応するから，「しようがない」構文が（「Vべきよう」が「[文 V] べきよう」と分析されるのと似て）文に構造的に支配されることになる。「しようがない」構文の「Vよう」がそもそも名詞であるならば，それは〈ある行為・動作をする術がない〉という意味であり，動詞句的な意味である。一方，主語に対応する「が」格名詞があらわれると，文が対応する意味は命題となり，〈ある者が特定の行為をする術をもたない〉すなわち〈ある命題が起こる可能性がない〉という意味になる。「が」格名詞があらわれることが，〈動作が起こりえない〉ことから〈命題が起こりえない〉ことへの意味拡張を伴うのであれば，「が」格名詞が出現することは「しようがない」構文の用法を拡張することであり，「が」格の出現が容易でない（あるいはなかった）と考えることもできよう。現代日本語において，これを支持する証拠はあるだろうか。一見すると，その差はわかりにくい。

(91) a. 少年たちはその部屋から無傷で逃げようがなかった。

b. その状況下では，少年たちがその部屋から無傷で逃げようがなかった。

（91a）は「少年たち」が主部であり，残りが述部である。そして，少年たちにとって〈逃げるという動作が起こりえない〉という意味になる。一方，（91b）は「その状況下で」が主部であり，残りが述部である。〈少年たちが逃げるという命題が起こりえない〉という意味を表すことになるが，両者に意味の差は感じられないであろう。次の例を見てほしい。

(92) a. すべての少年はその部屋から無傷で逃げようがなかった。

b．その状況下では，すべての少年がその部屋から無傷で逃げようがなかった。

（92b）が両義的になることに注意してほしい。すなわち，全少年が脱出不可能という意味と全少年が脱出可能であるという訳ではないという意味の２つがある。（これは「Ｖようがない」の作用域と関係しているものと考えられ，それはすぐ上で論じた区別から帰結すると考えられる。）

以上の議論から，「しようがない」構文において，「の」格なしであらわれる要素には（通時的な）違いがありそうである。

(93)　「の」格なしでの名詞の出現しやすさ～どの格助詞がつくか

「と，に，へ」など　＞「を」＞「が」

「が」や「を」などのいわゆる構造格は出現しにくく，また，文よりも小さな動詞句にあらわれる「を」が「が」よりも早くあらわれたと考えられる。こうした議論が「しようがない」構文についての共時的な説明にどの程度，関与するかはよくわからないが，最終節で考察を加えてみたい。

3.9　まとめ

通時的に見た場合，「しようがない」構文は比較的に新しい表現だと言える。同じような意味を表す形式として，かつては，「Ｖべきやう」という形式があり，実際には「やう（よう）」の前に文が来た（助動詞「べし」は文末）。この形式が「しようがない」構文に取って代わられたとき，独立して存在していた「Ｖよう」が採用されたと考えられる。「べし」はその直前の動詞が終止形であるが，「Ｖよう」では連用形であり，簡単に取って代わられたのではなかったかもしれない。それゆえ，現代日本語には見られない表現も使用された。また，「しようがない」構文の初期において，「Ｖよう」は純粋な名詞として扱われたと考えられ，動詞と関係をもつ要素は名詞句内で「の」格を経て関係するのが主流であったと思われる。この表現形式が拡張し，名詞句外に項となる要素が出現するようになり，現代日本語に繋がっていると考えられる。また，いきなりすべての動詞の項が「の」格なしであらわれたのではなく，格助詞によって出現のしやすさに違いがあることを示唆した。

4．結語

本稿は「しようがない」構文を取り上げた。通時的考察を加味すると，「しようがない」構文は次のように考えることができる。（そして，それは共時的な分析において，「しようがない」構文がどのように習得されるかということと一部，連動している可能性がある。）まず，「Ｖよう」は名詞として単独で機能する。これは形式として極めて単純なので，現代日本語においても基本的なパターンであると考えることができるだろう。

(94)　a. 私は答えようがなかった。
　　b. その問題は答えようがない。
　　c. 私には答えようがなかった。

(94c) は，存在文のパターンに則って，「に」格名詞があらわれている。さらに「Vよう」を拡げ，名詞句にすることができる。

(95)　a. 文句の付けようがなかった。
　　b. 彼女のレポートには文句の付けようがない。

そして，表現されなくてもいいような強調の表現があらわれる。

(96)　a. 地震はどうしても防ぎようがない。
　　b. 私は何も答えようがなかった。
　　c. 彼はどうとも言いようがなかった。
　　d. 彼女の作品は何にたとえようもない。

こうした表現が可能なのは「どうしようもない」という表現の存在が関係しているかもしれない。こうした表現を基盤にして，動詞の項と解釈すべき表現があらわれると考えることができる。加えて，存在文において一般に「が」格名詞の意味により，「と」格名詞や「から」格名詞があらわれることを考慮すると（「彼女と約束がある」や「傷から出血がある」など），「しようがない」構文において「と」格名詞などをそのままの形で表現するほうがすっきりとしたものになり，表現力も豊かになる（(97b) の「しか」など）。

(97)　a. その映画の質は他の作品と比べようがない。
　　b. それは奇跡としか言いようがない。
　　c. 彼の作品は他にたとえようがない。

あるいは，意味関係を明示的に示す格をもった名詞が「は」によって主部になることも見逃せない。

(98)　a. 彼女に（対して）は答えようがなかった。
　　b. 彼とは話し合いようがなかった。
　　c. 彼女からは真相の聞きようがなかった。

(99)　a. 私は，彼女に答えようがなかった。
　　b. 私は，彼と話し合いようがなかった。
　　c. 私は，彼女から真相の聞きようがなかった。

そして，いわゆる構造格の「が」と「を」も可能になる。

(100)　a. 彼女には，その仕事を終わらせようがなかった。
　　b. 彼には，そのユーモアがわかりようがない。
　　c. 彼は，その悪い癖が直りようがない。

このような細かな分類は，通時的な分析においては必要かもしれないが，その一方で，現

代日本語における共時的な分析においては，そこまで分類して考える必要はないかもしれない。

本稿の提案では，「に」名詞，「と」名詞，「を」名詞などが「Vよう」の動詞とは構成素を形成せず，動詞「ある」の否定表現である「ない」や「ありません」と姉妹関係にあると仮定した。これには，反論が予想される。特に，自動詞「ある」と「を」名詞句の共起はおかしいと唱える者があることだろう。しかしながら，日本語以外に目を向けると，自動詞が特定のパターンにおいて他動詞として使われることが観察される。英語の例を挙げると，次のようなパターンがある。

(101)　a. John kissed Mary on the hand.「ジョンはメアリーの手にキスをした」

b. The father touched/patted the son on the shoulder.

「父親は息子の肩に手をやった」

c. Linda hit/punched Bill in the face.「リンダはビルの顔を殴った」

これらは「主語＋動詞＋目的語＋身体の部分」というパターンになっており，上の例では「身体の部分」を表す表現はなくてもよい。（すなわち，動詞は目的語を取る他動詞である。）英語において，この形式がパターン化されているので，自動詞もこのパターンにあらわれることが可能である。

(102)　Mary looked John in the eye.「メアリーはジョンの目を見た」

Cf. *Mary looked John.

同様のことが，時間表現 -away 構文（Jackendoff 1997）や同族目的語についても言える。

(103)　a. John slept the afternoon away.「ジョンは午後を寝て過ごした」

b. The man died a natural death.「その男は自然な死を迎えた」

sleep や die は一般に自動詞と考えられるが，その直後に（目的語と見なされる）名詞が来て他動詞として使われている。こうしたことを踏まえると，特定のパターンが強化されると，通常はありえない現象に繋がると言える。「しようがない」構文にもそうした側面が見られるのである。

以上，「しようがない」構文について見てきたが，ここからわかるのは，日本語の知識が複雑なものであるということである。だが，この構文が説明しがたい独自の特性をもっていると言うよりも，他の現象と重なる部分があることも見た。また，通時的な観点を取り込むことで，現代日本語では見えにくい部分が浮き上がってくることもわかった。

「しようがない」構文は「Vよう」が動詞の項をその名詞の外側に実現させる現象であると本稿は主張した。いわゆる軽動詞「する」を含む表現と比べてみよう。「する」に先行する表現は述語的であり，「する」と直接的に語を形成することもできることは言うまでもない。そうした文的な用法が基本であると考えると，「しようがない」構文との違いが見えてくる。

(104)　少年は村人に狼が来ると警告した。

上記の「警告」が名詞の性質を前面に出すと次のようになる。(「する」は軽動詞として扱われる。)

(105)　少年は村人に狼が来ると警告をした。

その名詞がどこまで外側にある項をその名詞句内に取り込めるかにより，さまざまな表現パターンが生まれる。

(106)　少年は村人に狼が来るとの警告をした。

いわば，「しようがない」構文と軽動詞に関係する現象は，逆方向への流れであり（すなわち，前者は項の放出，軽動詞では項の取り込み)，現象面で両者に違いがあっても不思議ではない。

＊本研究は東京経済大学 2019 年度個人研究助成費（研究課題番号 19-22）による研究成果の一部である。

参 考 文 献

阿久澤弘陽．2018.「複雑述語の述語形式の違いから見る構造と意味の対応関係：『V すぎる』と『V すぎだ』の分析」『聖学院大学総合研究所 Newsletter』8-2，39-44.

Grimshaw, Jane, and Armin Mester. 1988. “Light Verbs and θ-Marking.” *Linguistic Inquiry* 19: 2, 205-232.

Jackendoff, Ray. 1997. “Twistin’ the Night Away.” *Language* 73: 3, 534-559.

影山太郎．1993.『文法と語形成』ひつじ書房.

Kishimoto, Hideki. 2001. “Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese.” *Linguistic Inquiry* 32: 4, 597-633.

Sugioka, Yoko. 1986. *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*. Routledge, 2018.

由本陽子．2012.「『動詞＋過ぎる』と述語名詞としての『動詞＋すぎ』」影山太郎・沈力（編）『日中理論言語学の新展望 3 語彙と品詞』123-143.

付録：否定文における「も」

否定文における不確定な表現と「も」の関係については，Kuroda（1965：93-94）が次のような例を挙げている。

（A1）　a. これまで誰も考えなかったアイディア

　　b. これまで誰が考えもしなかったアイディア

（A2）　a. ジョンは何も買おうとしない。

　　b. ジョンは何を買おうともしない。

また，Kato（1985：第 9 章）では，「も」が付いた不確定な表現の解釈が，それを含む最小の文ではない例外的な場合が存在することが示されている。

（A3）　a. 僕は誰も来ると思わなかった。　　cf. 僕は誰も来ないと思った。

　　b. 健は何も買って来なかった。

　　c. 私は誰も来ると信じていなかった。

　　d. そのチンパンジーは何も話すに至らなかった。

　　e. 誰も来るとは限らない。

　　f. 景子はどこへも行ったことがない。

　　g. 彼女は何語も話すことができない。

　　h. 象はどこにもいるわけではない。

　　i. 私は誰も呼んだ覚えがない。

　　j. 彼は今日は何も食べる余裕がない。

　　k. 彼は誰にも分かる見込みのない話をしている。

「誰も来ない」のように単文内で不確定な表現が否定表現とともに解釈を受ける場合，ある種の統合構造における階層関係があると考えられている（C 統御　c-command；否定表現のすぐ上の構成素の中に不確定な表現が包含される）。先の Kuroda（1965）の例でも同様である。上の（A3）の例でも，否定表現と不確定な表現の関係を考えた場合，それはやはり C 統御に基づいた作用域により説明できそうである。

「しようがない」構文で見た例はどうだろうか。

（A4）　a. 誰にも文句を言いようがなかった。

　　b. 誰に文句も言いようがなかった。

　　c. 誰に文句を言いようもなかった。

文という構成素は表現全体であるから，不確定な表現と否定表現の関係は基本的な関係で説明でき，問題はない。問題となるのは，不確定な表現「誰に」と「も」の関係である。Kishimoto（2001）は LF で高い位置に編入させるが，特に（A4b）において，どこが移動

先となるか不明である。また，Kishimoto が出した「太郎は誰に｛相談／質問｝もしなかった」のような例では，「相談」などの動名詞（verbal noun）が軽動詞（light verb）の「する」に編入するというものであり，「する」が項構造をもたないとする立場からは自然な考え方とも言える。（Kishimoto は他の動名詞として「質問，発表，公開，提案」などを挙げている。）他方，上で示した「しようがない」構文の例では，まず動詞は項構造をもった「言う」であり，また「も」が付いた名詞は「文句」である。「* 文句（を）する」とは言わないから，「文句」を「相談，質問，発表，公開，提案」と同等に考えることはむずかしい。

さらに，次の自然な表現では「も」が付いている名詞が（2 つ目の）不確定な表現である。

（A5）　a. 誰に何も言わずに家を出た。

c. 誰に何も気兼ねすることはない。

d. その作品は，誰が何も手を入れる必要がないほど，完成されていた。

f. うまく行っている限り，誰が誰にも文句を言わなかった。

h. 最近は，どこに何も見に行っていない。

次の例では「も」がないが，表現としては自然である。

（A6）　a. 私は，誰に何一つ相談することなく，犬を飼うことに決めた。

b. 誰に何ひとつ手伝ってもらわずに，模型を完成した。

c. 誰から何ひとつ言われることはなかった。

この場合，「も」がないので，「も」の領域を問うことがそもそもできない。

付 録 ・ 参 考 文 献

Kato, Yasuhiko. 1985. *Negative Sentences in Japanese*. *Sophia Linguistica* 19. Sophia University.

Kishimoto, Hideki. 2001. “Binding of Indeterminate Pronouns and Clause Structure in Japanese.” *Linguistic Inquiry* 32: 597–633.

Kuroda, S-.Y. 1965. *Generative Grammatical Studies in the Japanese language*. MIT dissertation.